

# おむつ皮膚炎に続発した表在性膿皮症に対する テリオス錠300mgの治療効果

兵庫県西宮市:A動物病院

## 緒言

犬におむつなどを着用させた場合、排泄物による刺激、通気性の悪さ、摩擦などから、皮膚炎(かぶれ)を発症することは少なくない。特に排泄物が長時間被毛に付着したままにしておくと、細菌が増殖して表在性皮膚炎を引き起こすので注意が必要である。

今回、臍と陰茎の間に生じたおむつ皮膚炎に続発した表在性膿皮症に対し、セファレキシン(以下、CEX)製剤のテリオス錠300mgを用いた結果、28回の連続投与が1回も抜けることなく実施され略治したのでここに報告する。

## 症例プロフィール

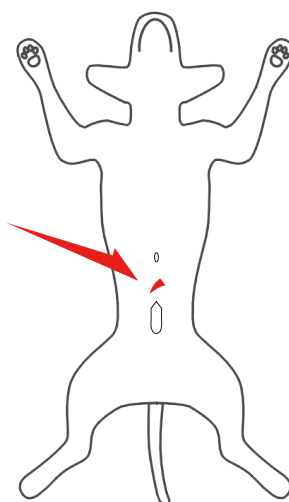
品 種：ポメラニアン

性 別：雄(去勢済)

年 齢：5歳

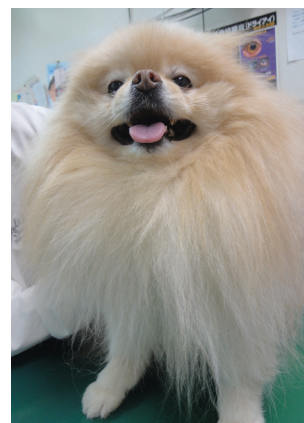
体 重：8.9kg

稟 告：飼主は、患犬の腹部の皮膚がかぶれやすいため赤ちゃん用のオーガニックコットン配合のおむつとペットシート(敏感肌用)を使用していた。  
3/11に腹の中央部がかぶれ、炎症と痒みが激しくなったため来院した。



症例の病変(矢印の赤い部分)

症例の写真



## 治療および経過

### 投与1日目

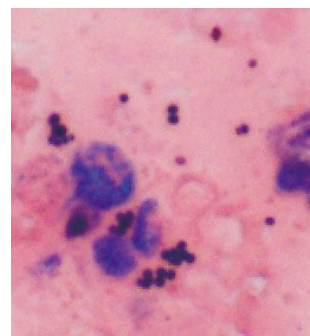
臍と陰茎の間におむつ皮膚炎に続発する表在性膿皮症が認められた(写真1)。病変から多数のブドウ球菌(顕微鏡写真)が認められたため、テリオス錠300mg、15mg/kg×2回/日×7日間の投与を開始した。

### 投与5日目

臍と陰茎の間の表在性膿皮症は改善してきたが、まだ病変は残存していたため(表)、テリオス錠300mgの2クール目(7日分)を追加処方した。

### 投与14日目

2クール目の投与最終日に、飼主が撮影した写真によると、臍の後方にあった表在性膿皮症病変は、ほとんど消失していた(写真2)。

病変の顕微鏡写真  
(グラム染色)

## 外部所見の変化 (矢印)



【写真1】投与1日目



【写真2】投与14日目

表 外部所見スコアの変化

	腹部病変			++	重度
	大きさ	赤み	痒み		
投与1日目	++	++	++	+	中程度
投与5日目	+	+	+	±	軽度
投与14日目	±	±	-	-	正常

## 考察

当院では、おむつ皮膚炎予防のためおむつの使用を控えるよう飼主を指導しているが、本症例では、夜中に布団の中で尿を排泄することがしばしばあったため、飼主の判断で、夜に限りおむつをしていた。当該犬は皮膚が弱いため「敏感肌用おむつ」や「敏感肌用ペットシート」を使用していたとのことだったが、腹部中央部がかぶれ、炎症と痒みが激しくなったため来院した。

来院初日の病変部からはグラム陽性球菌が多数確認され、房状に集まっている所も数カ所確認されたため、原因菌は*S. pseudintermedius* (顕微鏡写真(表面))と考え表在性膿皮症と診断した。この表在性膿皮症の治療ガイドラインには、第一次選択薬としてCEXとアモキシシリン/クラブラン酸(以下、AMPC/CVA)が挙げられている。露木らの報告によると、検査センターに送られてくる表在性膿皮症由来菌のほとんどが*S. pseudintermedius*と報告され、その臨床分離株の約半数がメチシリン感受性株、残りの半数がメチシリン耐性株とされている。

メチシリン耐性の*S. pseudintermedius*には、2剤に対して感受性を示す菌株は全くなかった。一方、メチシリン感受性株では、CEXに関してもAMPC/CVAに関しても全菌株が感受性を示しており、本菌による表在性膿皮症に対するCEXとAMPC/CVAの2剤の臨床効果はほぼ同等と考えられた。

一方で、単剤であるCEXと合剤であるAMPC/CVAで投薬コストを比較すると、2倍以上の価格差があり、CEXの方がかなり安価である。そこで、今回は、投薬コストを優先してCEX製剤のテリオス錠を用いることにした。

テリオス錠の投与期間は7日間であるが、投与5日目の所見で腹部病変の発赤および痒みが残っていたため、2クール目の投与が必要と判断した。

テリオス錠300mgは嗜好性が高く、14日間28回と比較的長い投与期間であったが、1回も欠けることなく連続投与できた。アドヒアランス\*が低い抗菌剤は治療効果減弱や耐性菌出現が懸念されるが、テリオス錠300mgはアドヒアランスの観点で、優れた抗菌薬の一つと考えられた。

\*アドヒアランスとは、動物の飼主自身が動物の病気を理解して、獣医師の指示に従って積極的に薬を用法・用量通り用いた治療を受け入れることを指します。